

「クーリエ」という仕事

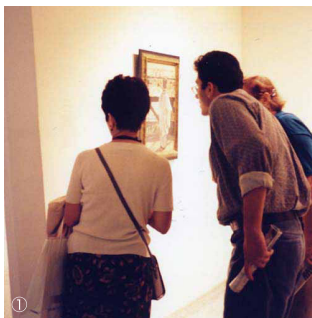
ルーヴル美術館や大英博物館といった、世界に名だたるコレクションを、日本にいながらにして楽しむ機会が増えました。しかし他方では、文化を一方的に受信するばかりではないかとの懸念も耳にします。そのような指摘に対しては、上の例とは逆の、すなわち、当館の所蔵品を海外に貸し出した経験が一つの回答になるかもしれません。千年祭を記念してニューヨーク、グッゲンハイム美術館で開催された「Art at the Crossroads」展に、鹿子木孟郎作《津の停車場（春子）》が出品されました。もちろん作品はひとりで太平洋を渡るわけではありません。とりわけ作品の実際の取り扱い（運搬、展示、撤去）については多くの人の手を経てなされるものであり、それ故に細心の注意を払って行われなければいけません。そこで重要な役割を果たすのが、作業の現場に立ち会い、作品の随行を任せられた「クーリエ」という仕事です。

展覧会の最終日から一夜明け、余韻もまだ残る中、撤去作業が始まりました。綿密に組まれたスケジュールをもとに作業は進められていきました。作品の状態に変化はないか。これからの長時間におよぶ運搬に耐えうる梱包を行っているか。片時も目を離さずに、疑問があれば即座に尋ね、すべての行程

を見守ることが求められます。

無事に木箱に梱包がなされると次は運搬です。今回は同時に運ばれる他の木箱の大きさから、旅客機ではなく貨物輸送機で運ぶことになりました。旅客機では座席が占める場所が大きな空洞となり、そこへ順次積み荷が運ばれてきます。通常の荷物ではないために職員の方が常に付きそって対応するという特別待遇でした。

それぞれの行程に関わる人々に共有されるのは、あくまでも作品が主で、人は従とする考え方です。そのためにクーリエの仕事は、時に深夜に及んだり、長時間トラックに揺られたりと、肉体的に過酷なものに耐えねばならぬこともあります。しかし、海外の美術館スタッフとの数ヶ月にわたる連絡交渉や、実際の作業現場で交わされるコミュニケーションは、共に美術に携わる仕事を選んだ者として、新たな発見と自覚をもたらしてくれます。また普段見慣れた三重県立美術館の作品が、はるばる海を渡り、異なる文化に生きる人の目に触れることは私たちにとって誇りでもあり、日常の活動への勇気を与えてくれます。そして、何よりも、そのような小さな交流の積み重ねが、コレクションこそが美術館の真価であるという、至極当然のことを実感させてくれるのです。(ly)



①: 鹿子木の作品を見る人々
②: 色とりどりの木箱
③: 輸送機積み込みのための梱包
④: 貨物輸送機内を運ばれる木箱

